

若いサボー屋さんへ

小橋澄治*

最初から私事で恐縮だが、京大を退官してはや5年が過ぎ、現在は人間環境大学という小さな大学で造園や緑化について教えたり、環境関連のコンサルタントで相談に乗ったりで、砂防から段々縁遠くなりつつあるが、皆さんのご配慮で国交省や府県の懇談会や委員会等に出していただき、砂防を忘れないように取り計らって貰っている。

年寄りの常で、現職の若い方がやっておられることには何かと気に入らず、あちこちで苦言や毒舌をはき、ご迷惑をかけている。今回はそういうことは止めて、なるべく、明るく建設的なお話をしたい。

現在お世話になっている大学は全教員数が40名足らずであり、相互に親密な交流が可能である上、若い人文系の先生が多く、高尚な哲学や文学の裏話を聞ける楽しみがある。「ご専門は？」というのが交流の最初の常套句であり、当然、当方が「サボー」といってもご理解ある筈はないので、「がけ崩れや土石流の研究です」ということになる。反応は予想に反したもので、「それは、それは、現実の社会に大変役に立つご研究で！」と素直に尊敬されることが多い。

それほどよい仕事と意識したことはないが、逆に「人文系」に携わる人には自分の仕事が現実の社会には役立たない「虚業」としての意識（私個人としては決してそう思わないが）、後ろめたさがあるようである。それはともかく、一般人の評価として「サボー」はそう悪くはない。悲惨な土砂災害についてのテレビや新聞の報道で「がけ崩れ、土石流」なる熟語が普通に使われるようになった効果もあろう。

昨今、公共事業に風当たりが強く、「公共事業としての砂防」への批判も増加しつつあるが、悲

惨な土砂災害を防ぐため日夜寝食を忘れて働くサボー屋は、一般の人々にとって、尊敬すべき存在なのである。現職のサボー屋さん、あなたの仕事は「聖職」（死語です、普通の仕事と異なる尊い仕事の意）ですぞ。誇りを持って下さい！ ところで、「聖職」であるサボーが「公共事業としての砂防」になるとなぜ批判されるかについては、「毒舌」になるので止めるが、賢明なるサボー屋さんには自明のことであろう。

ごく最近、1週間程、スイスでハイキングを楽しむ機会を得た。標高1500m程度にある宿からロープウェイなどで2000mから2500mまで上り、数時間をかけて、標高差数百mから千m、雄大にして秀麗な山岳風景と高山植物を見ながら、ゆっくり下れる快適なハイキングコースが無数にあるのは、さすがスイスである。山腹面から谷を巻いて、ほぼ平坦な歩道が数キロも続く。山に登るための登山道（日本にはこれしか無いのでは）でなく、誰でも歩ける（近く70歳になるジジイはもちろん、犬まで歩いていた）まさにユニバーサル設計のハイキング道である。急勾配歩道でないため、侵食による荒廃（日本の登山道の大問題である）もほとんど見られない。

このハイキング道を歩きながら、広大な山腹面に展開される雪崩防止柵、谷筋に設置される無数の谷止工など砂防施設をたくさん見ることができ、スイスのサボー屋のご苦勞が推察できた。ところで、わが国では一般の人がのんびりハイキングしながら、砂防設備をしっかりと見学できる歩道というものが無いのでは、と思った。というより谷の出口いっぱい大きい砂防ダム（昔に帰ってダムといわず「えん堤」と呼ぶことになったそうだが）できて、ハイキング道が無くなったとか、えらく迂回しなくては谷に入れなくなったとか、ハイカーと砂防とは仲が悪い例が多いように思

* 京大名誉教授

(財) 砂防・地すべり技術センター理事



エゾイソツツジ



ノビネチドリ



クロクリ



クマガイソウ

う。

昨今、公共事業では「住民参加」を重視し、砂防事業でも例外ではない。砂防に関わる自然環境調査でも、住民の方々向きの自然観察会や調査への参加が折り込まれる事例も増えてきた。それは結構

なことだが、「サポーへの住民参加」を目指すなら、もっと一歩踏み込んで、住民の方々に一つの流域の砂防計画、それに基づく施設をしっかりと現場で見せ、理解して貰う仕掛けが必要でないかと思う。

全国各地で展開されているグリーンベルト計画の対象山地や広い砂防指定地を持つ山地に（タテ方向の急峻な登山道ではなくて）ヨコ方向の緩勾配にして快適なハイキング道網を延々と建設してはどうか。荒廃している山腹や溪流、サポー屋が人知れず苦勞して作っている砂防えん堤などの施設、山腹工や砂防林など、ハイカーにいやでも目に付くだろうし、おのずからサポー屋の遠大な砂防計画もご理解いただけると思う。要所、要所にさりげなく、判りやすい解説板を設置すればいいことはない。いわれなき批判が高まる「公共事業としての砂防」に正しいご理解を得るのに最も有効な手段であることを断言したい。

わが国のハイカー人口をばかにしてはいけない。有名にして快適なハイキング道を持つ山はどこでもシーズン中は満員の盛況である。高齢者の比率が高いが、これから急激に高齢者社会になることを考えると、まずは高齢者を味方につけるのが得策だろう。年寄りでも快適に歩けるハイキング道網が完備されていると聞けば（植物や虫、鳥

類が豊富であればなおさら）、どっと高齢ハイカーが押し寄せることうけあい、安全であることが判れば孫もついてくるだろう。

また私事で恐縮だが、60歳になった時、「おまえのような無

趣味の人間はこれからが大変で、大型ゴミか、ぬれ落ち葉になるのが必至だ」というありがたいご忠告を素直に受けて、いろいろ趣味を広げることにした。その一つとして、野や山に出掛けて植物の花の写真を撮り、学名を調べてパソコン内に集積するというのがある。国内だけでも1500種以上集めた（今の大学のHP上で公開しつつある）。しかしだんだん視力が衰え、カメラのピントが怪しくなり、図鑑で名前を同定する根気も減ってきて、そう長くは続かぬ趣味という予感がする。

山野をハイキングしながらのんびり花の写真を撮るといのは極めて優雅な印象を与えるが、ある山にある季節に行く機会はその簡単にはなく、おまけにある花に出会えるかどうかはある確率的事象であり、歩いているうちに、だんだん切羽詰まった気持ちになり、お目当ての花に会えたら一期一会の気分である。要するに歩いている間、花しか見えぬようになる。これを「花の目」と秘かに称していたら、虫屋さんにも「虫の目」という現象があるそうで、彼等はジープで山道を走っていても、飛んでいる虫を判別できるようになるそうである。その代り、ジープが谷に突っ込むこともあるそうだ。

趣味にせよ、仕事にせよ、それに没入すればするほど、他の事象が目に入らぬようになり、他人

から見れば、狂気の沙汰に見えてくる。サポ一を天職とするサポ一屋が山や溪流を見るとき「サポ一の目」になっているのは当然であり、そうであって欲しい。だけど、今の時代、四六時中「サポ一の目」で暮らして貰っては困るようである。山や溪流を土砂災害の発生場、防災空間としてのみ見て貰っては困るのである。「そこはそれぞれ独自の自然生態系が成立している空間であり、かつ付近住民の生活と深く関わる空間でもあり、そういう複合的な価値を持つ空間であることを理解した上でないと、これからの砂防事業が成り立たない」という意味のことは最近のサポ一屋さん向きの雑誌や文書に頻繁に述べられている。が、真面目なサポ一屋にとっては「具体的にどうしろというのか」とお考えだと思う。

私の具体的提案は、十分な「サポ一の目」をお持ちの真面目なサポ一屋さんには、趣味として、自然生態系の構成要素の一つを対象とした目（花の目、虫の目、鳥の目、魚の目などなどなんでも良い）をもぜひお持ちになっては、ということである。一つの「目」を身に付けるには、その趣味に相当入れ込み、ある種の苦勞をして没入しなくてはならない。だけどその効果は絶大であり、私が「花の目」を身に付けた（というより取り付かれた）瞬間から、大げさにいえば全ての風景が一変した。山野はもちろん、町中の通い慣れた通勤路も「花の目」から見れば大変新鮮なものになった。つまり、今までの私にはなかった新しい視点が開かれたということであり、それを通じて自然生態系なるものを具体的に垣間見ることが可能になったし、名もなき（と思っていた）植物や虫の存在にこだわる意味もよく判るようになったよう

に思う。

厄介なことに、これからのサポ一屋さんが装着すべきといわれるもう一つの目は、「住民の目」である。ご存じのごとく、「土砂新法」のための基礎調査が各都道府県で始まり、特別危険区域の指定、公示に関わる諸問題の検討も始まっている。この法律の実効性は各地のサポ一屋さんが決めた「危険さ」を、対象域に住む住民の方々がいかに正確に理解し、対応していただけるかにかかっている。

それはサポ一屋が、優秀な「サポ一の目」と同時に住民の視点からの「住民の目」も兼ね備え、住民への「危険さ」の情報伝達法に問題がないか、住民の不安に親身に相談に乗れる対応準備ができているかを判断できなくてはならないだろう。「住民の目」をどうすれば装着できるかが大きい課題である。それは、サポ一屋が日常生活の中で意識して「一人の市民」として生きているかを問われていることになるが、多くの真面目なサポ一屋が所属する「仕事人間」族には辛い質問ではある。「住民の目」を装着するための先鋭的具體策は、優秀なサポ一屋であるあなたが決めた「危険さ」を、典型的な一般市民であって、あなたの家庭の地域コミュニティの担い手であるあなたの奥さんに（独身の方には、あなたにとって最も大切な女性）、正確に理解させ、その情報から派生する諸々の彼女の不安、疑問を全て解消できるよう説得が可能かということである。そんなことお前にできるか、と問われると、私としても「自信ある」とは言いにくい難しい課題である。